

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25381283

研究課題名(和文) グローバル社会に生きる日本の子どもの愛他性を育てる道德教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a moral education program to foster compassion of Japanese children living in a global society

研究代表者

宮里 智恵 (miyasato, tomoe)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：70646116

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：小学3年生から中学3年生までの児童生徒において、特に「表に表れない思いやり行動の示し方」や「表立った思いやり行動を受けたくない」場面や年齢段階があることが明らかになった。特に中学2年生、3年生は「校舎の陰で泣いている場面」において「相手のことを思えばこそ表立って思いやり行動をしない」「自分も表立って援助してほしい」とする割合が、小学生より多いことが明らかになった。小中学校の道德科では「考え、議論する道德の授業づくり」が求められていることから、本研究で明らかになった知見を生かし、「思いやり」をテーマとした授業の教材開発と授業展開の提言を行った。

研究成果の概要(英文)：It was revealed that there was a scene and an age stage in "Participating behavior of behavior that does not appear in action" or "I do not want to take compassion action" among students from the third grade of elementary school to the third grade of elementary school. Especially for the second and third year junior high school students, "It is crying in the shadow of the school building", it became clear that the ratio of "do not act compassionately for others" or "I do not want you to help" is higher than that of elementary school students. Making use of the findings clarified in this research, we have developed teaching materials for lessons with the theme of "compassion" and suggested class development.

研究分野：道德教育

キーワード：道德教育 思いやり 援助行動 表に表れない思いやり 被援助 道德科

## 1 . 研究開始当初の背景

近年 , 日本の学校におけるいじめが大きな教育課題となっている。いじめの背景には愛他性の欠如があると考えられる。愛他性は思いやり行動を支える動機や態度である。今 , いじめ問題の解決に向け , 愛他性の育成が求められている。

また , 近年はこれまでにないスピードでグローバル化 , 国際化が進展している。これからの社会を生きる子どもには , 様々な国や状況の人と愛他性を持って接する資質が必要となる。異質な文化や背景を持つ相手に対しても愛他的にかかわる力を育てることは , グローバルな社会で通用する人材を育成することになる。

子どもの愛他性の強さや特徴を国際比較した松井ら ( 1998 ) によれば , 日本の中高生の愛他性は他国の中高生に比べて著しく低く , 愛他的行動をとる対象や状況も極めて限定的である。また日本の幼稚園児はアメリカの幼稚園児よりも愛他的行動が少ないとする報告もあり ( 氏家 , 古田 1980 ) , 日本の子どもに対する愛他性の育成は喫緊の課題である。

日本の学校において子どもが愛他性を学ぶ時間は「道徳の時間」である。愛他性は「思いやり」として小中学校全学年で指導されている。小中学校9年間の指導が効果を持つためには , 愛他性の発達段階を踏まえた系統的な指導が必要である。

Eisenberg ( 1986 ) によれば子どもの愛他性は6段階で発達し , 子どもが葛藤場面で愛他的行動をとる理由は「情緒的」から「理性的」へと発達する。しかし松井 ( 1998 ) は , 日本の中高生は年齢が上がっても情緒的理由で判断することを明らかにし , 愛他性の発達の違いは国の文化の違いによるもので「理性的」と「情緒的」に優劣や発達段階の違いはないとした。松井 ( 1998 ) に従えば , 日本の子どもの愛他性育成には情緒に働きかけ

る道徳の授業が有効と考えられる。

研究代表者はこれまでの研究で , 児童の愛他性育成を目的とした異年齢児交流活動の道徳授業について成果と課題を検討してきた ( 宮里 2008 , 2009 ) 。異年齢児交流活動は新学習指導要領で提唱された体験的な活動を通じた道徳学習の一つの指導法である。

研究の結果 , 異年齢児交流活動は子どもの情緒を揺さぶり , 愛他性育成に有効であることが明らかになった。その一方 , 異年齢児交流活動は子どもによって体験の内容が異なるため , 情緒的体験の質と量を統制できないことが課題として残った。この課題は体験型道徳授業に共通する課題である。

そこで本研究では , 子どもの情緒的体験の質と量を統制しやすい資料型道徳授業に注目する。文部科学省の道徳教育推進状況調査 ( 2003 ) によれば , 現在 , 道徳授業の大部分は副読本などの読み物資料を活用した資料型道徳授業である。資料型道徳授業では読み物資料に描かれた内容が子どもの情緒に働きかける。そのため資料の内容と発達段階に即した資料の配列が重要であるが , 愛他性育成をめざす道徳授業についてはこれまでそうした検討はほとんどなされていない。日本の学校で最も多く実施されている資料型道徳授業について , 子どもの愛他性の発達段階に即した授業プログラムの開発が必要である。

## 2 . 研究の目的

日本の小中学生の発達段階に即した愛他性育成のための道徳教育プログラムを開発すること。

## 3 . 研究の方法

**研究** : 「小中学生の援助行動表出に関する研究 表に表れない思いやり行動の出現に着目して - 」本研究分野に関する先行研究の検討を行い , 「表に表れない思いやり行動」について小学3年生から中学3年生までの発達の様相を明らかにする。

**研究**：「被援助の立場から考える援助行動  
小中学生における判断と道德教育への示唆 - 」思いやりを受ける側に立った時どのような援助を望むのかについて小学3年生から中学3年生までの発達の様相を明らかにする。

**研究**：「小中学生における援助を望まない理由分析と道德科「思いやり・親切」の授業の提案」研究と得られた知見を基に、新教科道德科における「思いやり・親切」の授業案を提案する。

#### 4. 研究成果

**研究**：本研究では道德的葛藤場面（「転ぶ」「宿題忘れ」「陰で泣く」）における援助行動のうち「表に表れない思いやり」の出現を発達的に明らかにした。研究の結果、次の点が明らかになった。

##### (1) 道德的葛藤場面における「非援助」の出現について

「転ぶ」「宿題忘れ」には「非援助」の選択に学年差は見られなかったが、「陰で泣く」は被援助者が仲の良い友達の場合は小3より中2,中3,小4より中2,中3,小5より中1~中3で「非援助」を選ぶ割合が有意に高く、被援助者がほとんど話したことの無い同級生の場合は小3~小6より中2,中3で「非援助」を選ぶ割合が有意に高かった。本研究では研究対象を小学3年から中学3年まで広げたことにより「陰で泣く」場面における判断には学年差が見られ、概して小3~小5より中2,中3で「非援助」が多くなることが明らかになった。

##### (2) 「非援助」に内在する「表に表れない思いやり」の出現について

「表に表れない思いやり」と判断された回答で最も多かったのは「役割取得」、次いで「社会的スキルの不足」「内面化された法律・規範・価値志向」であった。また、それらの出現には場面差があった。「転ぶ」場面は「非援助」の件数が少なく特徴を論

じることはできないが、「宿題忘れ」の場面では「内面化された法律・規範・価値意識」が、「陰で泣く」の場面では「役割取得」が多く出現した。また「社会的スキルの不足」は被援助者が「同級生」の場合のみ出現した。これらのことから、子どもが「表に表れない思いやり」を示す場合、被援助者の状況や被援助者との心理的距離など、場面によって異なる理由があることが明らかになった。

「表に表れない思いやり」の発達的な出現は「陰で泣く」場面で見出され、特に中2,中3で顕著であった。「陰で泣く」は他の2つの場面と異なり、被援助者自身が行動を決定しており被援助者の意思が伴うと考えられる。このことから、相手の意思にむやみに立ち入らないことも思いやりの示し方の1つであるとする現代の若者に見られる意識が、少なくとも中2,中3の子どもにすでに存在するのではないかと考えられる。

「道德に係る教育課程の改善等について」（平成26年、中央教育審議会答申）では「児童生徒が発達の段階に応じて学び（中略）一人一人が多角的に考え、判断し、適切に行動するための資質・能力を養う」ことの重要性を指摘している。本研究の結果明らかになったことを愛他性発達の実相の1つと捉えるならば、子どもの発達の段階に応じた「思いやり・親切」の道德授業を構築する上で、今後次のような方向で検討が必要と考える。

従来「思いやり・親切」の授業のねらいは「困っている人に思いやりの気持ちで接し親切にする」など、親切な行動をすることが学年を問わず強調されてきた。しかし、本研究から明らかになったように、同じ場面でも立場や状況によっては「非援助」の判断をする子どもが存在することや、その中には「あえて助けない」つまり「表に表れない思いやり」を示そうとする子どもが発達の段階が上

がるにつれて出現することを、まず教師自身が理解しておく必要がある。その上で「表に表れない思いやり」を含む援助行動のあり方について、子ども一人一人が多角的に考え、判断し、適切に行動するための議論をしっかりと行う授業を構築する必要がある。

また、従来「思いやり・親切」の道徳授業では相手をどう援助するかという援助者の視点で考えることが多く、「自分が被援助者ならどうしてほしいか」を中心にして話し合うことは少ない。しかし、今回の研究で「非援助」の理由に「役割取得」(自分だったら助けてほしくない)が多く挙げられたことから、子どもは自然に「被援助者の視点」に立って思考しているのではないかと考えられる。同じ事象でも立場や状況によって見方が異なることを理解させるためには視点の転換を図る道徳授業が必要と考えられるが、そのためには「被援助者」はどのような援助を望むのかについても議論する道徳の授業が必要である。「援助者」「被援助者」両方の視点を持つことで、子どもは多角的な見方ができるようになると考えるからである。

**研究**：研究の結果、被援助者として相手に望む援助行動は場面によって学年間の相違があることが明らかになった。「転ぶ」の場面では小3を除いて全体としては何らかの援助を望んでいることが分かった。

「宿題忘れ」の場面では、小学生は解答をうつさせてもらうという援助は望まず、解き方やヒントを教えてもらうという援助を望むことが分かった。これに対し、中2、中3は解答をうつさせてもらう援助を望むことが分かった。中1はその過渡期と考えられる。「宿題忘れ」という小中学生の日常生活にありがちな場面において、被援助の考え方が中2で逆転することが明らかになった。

「陰で泣く」の場面では、小学生では全体としては何らかの援助を望むが、中学生では中2、中3は援助を望まないことが分かった。

中1はその過渡期と考えられる。「陰で泣く」場面は被援助者にとって特別の事情があると考えられるが、被援助の考え方が中2で逆転することが明らかになった。

本研究では「宿題忘れ」と「陰で泣く」の場面で、被援助の考え方が中2、中3と小学生で異なるという結果を得たが、同様の結果は宮里・高橋・森川(2014)による援助行動に関する研究においても示されている。宮里ら(2014)は小中学生を対象に「表に表れない思いやり行動」の出現について調査し、思いやりがあるからこそ、あえて助けない「非援助」が「陰で泣く」場面の中2、中3で顕著に出現することを明らかにした。宮里ら(2014)の結果は援助する側から援助行動について考えたものであるが、援助される側から考えた本研究においても、中2、中3の段階にそれまでとは異なる判断が存在することが明らかになった。

平成30年度及び31年度から完全実施される道徳科の小学校及び中学校の学習指導要領では、児童生徒の発達段階を踏まえた授業への転換が重要視されている。本研究と宮里ら(2014)の研究結果を踏まえれば、少なくとも中学校における「思いやり・親切」の授業は、特に中2、中3において、それ以前とは異なる道徳的判断を持つ生徒が存在することを踏まえたものに転換する必要がある。例えば、「陰で泣く」場面のように、「あえて助けない」「助けてほしくない」という考えを持つ生徒の意見を引き出し、「相手を本当に思いやること」について多面的多角的に議論する授業が求められる。また、そのような議論が成り立つ道徳教材の開発も必要である。

**研究**：被援助の立場に立った時、援助を望まない理由については次の点が明らかになった。

**場面により「援助を望まない理由」に違いがある。**

「転ぶ」場面では「被援助による自己評価

の低下」が学年を問わず多く、「宿題忘れ」の場面では「自立志向」が学年を問わず多かった。「陰で泣く」場面では「被援助による自己評価の低下」が学年を問わず多く、中学生で「被援助に対する満足感」が多かった。

### **場面により、ある「援助を望まない理由」が顕著に表れる学年段階がある。**

「陰で泣く」場面においては、「援助を望まない理由」として、中学生で「被援助に対する満足感」が多く挙げられた。校舎の陰で泣く、という行為は、その背景にかなりの困窮状態があると考えられるが、それでも自らの意思で校舎の陰に行き、涙を流すという行為は被援助者の能動性を表している。中学生はこうした場面において「友達」または「同級生」に援助されることに「不満感」「迷惑感」「痛痒感」があるとした。いわゆる「ありがた迷惑」を感じるということであろう。

平成 28 年 12 月に示された「幼稚園・小学校・中学校・高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」(文部科学省)の「15 道徳教育」の「指導の配慮事項」には、求められる質の高い多様な指導方法の例示として「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」が示された。読み物教材の登場人物への自我関与とは、登場人物に役割取得させながら「自分ならどうするか」と自分のこととして考えることである。また、松浦(2007)は「援助行動が成立したといえるのは援助者が行動を起こした時点ではなく、被援助者にとって援助が適切に完了した(完遂した)時点と考えられる」と指摘している。「思いやり・親切」の授業において、子供が本当に相手すなわち被援助者が望む援助行動について考え、議論し、道徳科の目標が示す「自己の(人間としての)生き方についての考えを深める」(カッコ内は中学校)道徳授業とするためには、教材及び授業展開には次の点が求められると考える。

**教材**：考え議論する必然性が内包された教

材を用いる。

- ・子供が「思いやり・親切」について自身自身の問題として考えることができるよう、役割取得しやすい主人公であること。
- ・ストーリーには道徳的な課題を含んでいること。
- ・答えが一つとは限らない、あるいは多様な考え方ができるものであること。

**授業展開**：その価値について、子供が元々持っている考え方とは異なる考え方に出会うようにする。自分と異なる考え方に出会うことにより、子供は考えを揺さぶられ、改めてその価値について深く考えることになるからである。例えば次の2点が考えられる。ア：表立って助ける、あるいは助けないと、一見対立する援助の方法が考えられる場面で道徳的判断を行わせる。それらを交流することにより、子供は相手を助ける行動のあり方は複数あることに気づき、なぜそう行動するのか、その背景にある考えを議論し始める。イ：援助者の視点で進めつつ、ある時点から被援助者の立場にも立って考えさせ、どの行動が本当に相手を援助することになるのかを議論する。具体的には発問により思考を揺さぶるとともに、ワークシート記入などにより視点の転換を図る。

## **5. 主な発表論文等**

〔雑誌論文〕

宮里智恵(2017)小中学生における援助を望まない理由分析と道徳科「思いやり・親切」の授業の提案 平成 25 年度～平成 28 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 グローバル社会に生きる日本の子どもの愛他性を育てる道徳教育プログラムの開発(課題番号 25381283) 37-52. 査読なし

宮里智恵・高橋均・森川敦子(2016)被援助の立場から考える援助行動 - 小中学生における判断と道徳教育への示唆 - 学習開発学研究 第 9 号,133 - 141. 査

読なし

宮里智恵・高橋均・森川敦子（2015）小  
中学生の援助行動表出に関する研究 -  
「表に表れない思いやり」行動の出現に  
着目して - 学習開発学研究 第8号，  
211 - 221．査読なし

〔学会発表〕なし

〔図書〕なし

〔産業財産権〕なし

〔その他〕なし

## **6．研究組織**

### (1) 研究代表者

宮里智恵（Miyasato Tomoe）

広島大学．教育学研究科．教授

研究者番号：70646116

### (2) 研究分担者 なし

### (3) 連携研究者 なし

### (4) 研究協力者

森川敦子（Morikawa Atsuko）

高橋均（Takahashi Hitoshi）